

『散らされた人たちは』(使徒の働き 8章1-8節、11章19-26節) 2020.5.10.
<はじめに> 普段なら当たり前でできたことが、許されない状況が広がっています。教会に集えるのも当たり前ではありません。個人的理由だけでなく、大規模災害・社会不安に左右されます。これはあってはならないことでしょうか。その中で私たちはただ流され、諦めるしかないのでしょうか。

I 迫害と離散

①ステパノ殺害を越えて(7章)

主イエスを救い主と信じる群れは、ユダヤ教指導者にとって目障りでした。群れが増殖するにつれて無視できなくなり、ステパノを最高法院に連行し、彼の弁明に憤慨した指導者たちは、彼を石打ちの刑で殺害し、エルサレムの教会全体に迫害が及びました。

②分断・捕縛・離散(8:1-3)

使徒たちは当局の監視下に置かれ、信者たちはエルサレムから追い出されユダヤ・サマリヤ諸地方に逃げるしかありませんでした。ステパノを葬り、エルサレムに留まった敬虔な信者たちも次々捕えられて牢に入れられました。エルサレム教会はほぼ壊滅でした。

③あってはならないこと？

戦乱・迫害・動乱・災害などは誰も願いませんが、度々起こり、主を信じる者たちの平穏な営みを壊します。私たちが信じる主は全てを治めておられるのなら、これらのことが我が身に及ぶとき、どう受け止めればいいのか。御心、それとも御怒りなのでしょうか。

II 散らされた人たち

①福音を伝えながら(8:4-8)

散らされた信者たちは身を隠さず、福音を証ししつつユダヤ・サマリヤに散り行きました。エルサレムでの集いの場は失われたことは辛く苦しいことですが、それで彼らの内にある信仰の営みが吹き消されません。むしろ、その中で主を証しは輝いたのです。

②ユダヤの外にまで(11:19-26)

9章で迫害はユダヤを越えてダマスコにまで及んでいます。北に離散した信者はさらに遠くへと逃げざるを得ず、フェニキア、キプロス、アンティオキアに達します。それまではユダヤ人だけに証しされていた福音が、ギリシャ語を話す人たちにも宣べ伝えられました。

③使徒の働き=聖霊の働き

本書の別名です。人間の動きが表立っていますが、この背後におられる聖霊なる神が主導権を持ってことを動かしておられます。使徒 1:8 の主の約束は、順境下での福音宣教だけで実現したではありません。迫害・試練・反対さえも推進力になっています。

III 今を生きる私たちに

①今は悪い時代？

状況・感覚は決して良いとは言えないでしょう。しかし八方塞がりではありません。暗い時代だからこそ、私たちの内にあるイエス・キリストが一層輝く機会にもなります。この世と私たちクリスチャンとの違いはどこにあるのでしょうか。彼らの中から見つけ出してください。

②本質をとらえて

形式や組織・方法は本質の表われであり、多様です。かたちにこだわって本質を見失うことは人の常です。聖日に教会に集まり、牧師から説教を聞くだけが礼拝でしょうか。彼らはどうでしたか。教会・使徒から離された彼らは、どうやって主とつながっていたのでしょうか。

③教会も変わる時

神様は時代を変えるために、まず教会とクリスチャンを変えられます。危機の中にも主は主導権を握っておられると信じますか。私たちは明らかに曲がり角を迎えています。今までのかたちにこだわりますか。むしろ何物にも左右されない主との関係を深めませんか。

<おわりに> 教会の歴史は危機の連続です。クリスチャンはそこで揺す振られ、本当に大切なもの、変えてはならないもの、本質的なものに目覚めました。彼らのうちに住まわれる聖霊が、必要なことを教え、彼らを導かれます。それは今を生きる私たちにも同じです。(H.M.)